

台湾濁水系流域中継港〈西螺〉の成立・展開・変容 その2 日本植民地期における市街地の拡大・変容

台湾濁水流域 市区改正 西螺大橋
西螺(雲林縣) 西螺都市計画 土地開発

正会員 青井 哲人* 正会員 ○寺内 達也** 正会員 陳 穎楨***
同 河野 紗輝** 同 保川 あづみ** 同 辻原 万規彦****
同 今 進太郎** 同 相川 敬介** 同 恩田 重直*****
同 杉本 まり絵** 同 武田 峻哉**

1 はじめに

1-1 本論文の目的

前稿では、17-18世紀以降の漢人入植から植民地支配に至る西螺街の歴史の変遷について述べた。本稿では、インフラの整備や市区改正が行われた日本の植民地時代を対象に、西螺の市街地が拡大していく過程を、市街地拡大に関わる主要な出来事やそれに伴う空間の変化、部分的ながら土地台帳での地割と所有の関係等によって見ていく。その際、市区改正での空間の変容を捉えるとともに、具体的な建物の変化を臨地調査の成果を活用して述べる。また、西螺街を東西に貫く延平路の街頭、街尾での土地開発の類型化を試みる。

2 インフラの整備による市街地の拡大

2-1 鉄道

市街地拡張の要因のひとつにインフラの整備が挙げられる。鎮誌によると、日本統治初期、東洋製糖株式会社と大日本製糖株式会社が軽便鉄道を開通。これにより西螺は斗六や斗南・虎尾・崙背などと接続され、貨物だけでなく、一部旅客の機能も担った。聞き取りによれば、この軽便鉄道の停車場(日糖社線駅)付近に、農作物を収容する倉庫があったという。また、延平路と縦貫道路の交差点に新たに西市場が建設された(文献2)。これら軽便鉄道や西市場の建設によって、西螺街は西螺溪による河川流通とは異なる、もうひとつの流通拠点が確立されたといえる。



図1 西螺鎮主要市街地

(2017年8月時点 地籍圖資網路便民服務系統・フィールドワークより作成)

2-2 道路

鎮誌によれば、1936年には、崙背とつなぐ西螺崙背道路、北港へ接続する海岸道路や、台中州から西螺を通り斗六まで接続する縦貫道路などの道路交通網ができる。こうして西螺は、自動車旅客輸送サービスも含む地域一円の陸上交通網の拠点へと編成されていく。

また、1920年には西螺溪に防波堤が建設されて流路が固定されると、1936年には西螺街・北斗街・員林街・溪州庄・海口庄などの街庄長や各地方の士紳と日本の官僚による「濁水溪人道橋架設期成同盟会」が共同で創立され、1937年に西螺大橋が着工。太平洋戦争を挟んで、1952年に竣工している。

3 市区改正による変化

3-1 西螺都市計画図

台湾都市計画令(昭和11年8月27日律令第2号)の公布を目前に控えた1935年に「西螺都市計画図」が作成されており(図2)、これにもとづいて道路拡幅を主眼とする市区改正事業が実施された。計画によれば、東西の主要街路は15mないし15.5m、南北軸(現・建興路)は18mまで拡幅されている。鎮誌には、格子状の街区、道路は歩車分離、街路樹の整備といった記述もあり、さらに砂利道の舗装、排水溝整備、標識サインや街灯の設置なども行われた。

聞き取りによれば、市区改正前は竹造や木造の町屋が櫛比する街並みであり、街頭の西螺溪付近には竹市が



図2 1935年西螺都市計画図

Development of Sailê(Xiluo), a junction port in the Lôchúikhoé(Zuosuishi) River Fan, Taiwan, Part 2
Expansion and Transformation of the Town under the Japanese Colonial Rule

*Akihito AOI **Tatstuya TERAUCHI ***CHEN Yin-Chen
Saki KONO **Azumi YASUKAWA **Makihiko TSUJIHARA
Shintaro KON **Keisuke AIKAWA ***Shigenao ONDA
**Marie SUGIMOTO **Shunya TAKEDA

あったという。しかし、市区改正の道路拡幅時に、亭仔脚付き、洋風ファサードの街屋に改築されている。今日「西螺延平老街」と呼ばれる町並みはこの景観をよく伝える。

3-2 道路拡幅による建物の変化（延平路 246 号）

延平路と建興路の交わる角地に立地している木造・煉瓦混構造二階建の街屋（延平路 246 号）は、図 6 のように、道路の拡幅によって、町屋の一部が取り壊され、外周を取り巻くように煉瓦造ファサードが取り付けられている。1 階面路部には亭仔脚がつくられているが、現在は客席や厨房として活用され、トタンが貼られて通れない箇所もある。図 5 のように、棟より後半部にはある木軸が、前方にはなく、母屋がそのままレンガの壁に突き刺さっているが、これは道路拡幅時の改造の痕跡であろう。また亭仔脚部分の 2 階床が 350mm ほど高くなっているのは、市区改正時に亭仔脚に要求される寸法を確保したためであろう。

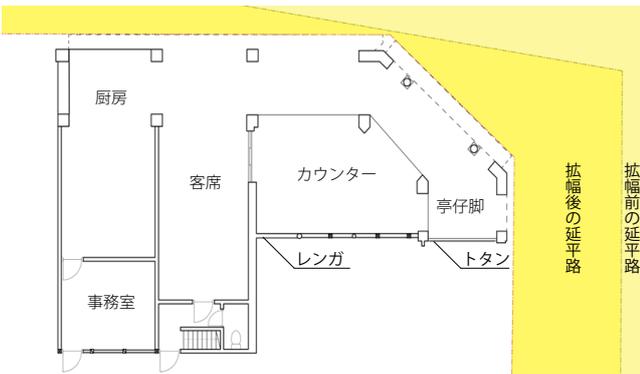


図 3 延平路 246 号 1 階平面図（地籍図から拡張前の延平路を復元）

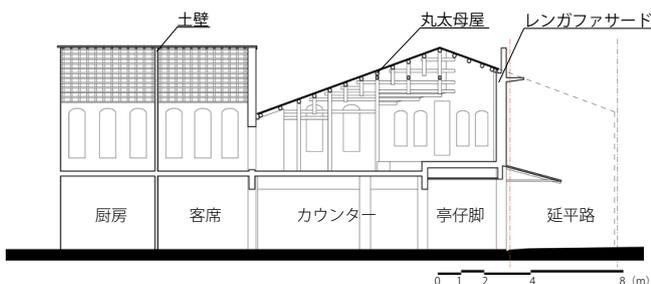


図 4 延平路 246 号 断面図（拡張前の延平路から元の形を推察）



図 5 延平路 246 号 丸太の桁がレンガのファサードに支えられる



図 6 延平路 246 号 延平路の拡幅で削られた街屋

4 地割と所有の関係から見る延平路

4-1 街頭

前稿でも述べたように、街頭は 18 世紀に遡る現存市街地で最も古い地区であり、すぐ東に西螺溪の河川敷に接し、かつては河港を拠点とする商業の街として栄えた。間口 3.5 ～ 4.5m 程度、奥行きが約 40m の狭長地割り上に平入り建物を反復する。土地台帳によると、植民地初期の土地所有者は、西螺街や二崙庄、斗六に住む地主層が多く、この地区の商人の大半はおそらく借地人であったと考えられる。

4-2 街尾

聞き取りによると、街尾は 1920 年代から 1930 年代にかけて、有力者である廖氏らによって開発された。この地区の宅地は、狭長宅地に割られた街頭・街肚と違って、18m × 57m などとかなり大きい。彼らはそうした地所の面路部に間口 3.5m ～ 4m の複数の店舗をもつ奥行 9m 程度の連棟式町屋を建て、その裏に邸宅を構えた。延平路沿いの店舗で呉服店や医院などを営み、あるいは店舗を賃貸に出し、その背後で農園・庭園のある美しい洋館や伝統的三合院に住んだのである。これは近代における市街西遷の型を示している。

5 むすびに

西螺街は、インフラの整備などにより流通の中継地点として発展し、高密度な街屋の集合体を形成した。その後の市区改正などによって街並みが一新されたのに加え、街尾では清代とは異なる土地開発が行われた。次稿では、現在の西螺街の建物について実測調査の成果を報告する。

参考文献

- 1 鄭玲惠『新修西螺鎮誌』（西螺鎮公所、2015 年）
- 2 富田芳郎「西螺探訪記」（『民俗臺灣：複製版』4 卷 8 期、1944、湘南堂書店）

* 本稿は科学研究費補助金基盤研究 (B) 「台湾都市史の再構築のための基盤的研究：都市の移植・土着化・産業化の視座から」（代表：青井哲人、平成 27 年～ 31 年度）の成果の一部である。

* 明治大学理工学部建築学科 教授・博（工）

** 同大学大学院理工学研究科 博士前期課程

*** 博（工）

**** 熊本県立大学環境共生共生学部居住環境学科 教授・博（工）

***** 法政大学エコ地域デザイン研究所 研究員・博（工）

*Professor, School of Science & Technology, Meiji University, Dr Eng. / **Master's Course, Graduate School of Science & Technology, Meiji University / ***Dr Eng. / ****Professor, Faculty of Environmental & Symbiotic Sciences, Prefectural University of Kumamoto, Dr Eng. / ***** Researcher, Laboratory of Regional Design with Ecology, Hosei University, Dr Eng.